

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授承認雑誌第六二七号  
平成二十五年五月一日発行(第四百十六卷第五号)

# ホトトギス

五月号



## 俳句随想 〔三百七十一〕

汀子

省略は俳句の命である。その一方で省略を心掛ける中で大切な表現を削ってしまったて肝心なことが言えてないことがよくある。

先日私はリハビリを受けに行つた病院の帰り道で素晴らしい情景に出合った。芦屋の埋立地から見た六甲山の雪山である。東京で雪が積つたニユースが飛び交つた次の日芦屋市の北に位置する六甲連峰にも見事に雪が積つた。芦屋の地続きのお多福山は積つてなかつたが千米近い六甲山は真つ白な雪山であつた。その見事な情景をタクシーの中から堪能した。早速帰宅して、我が家の三階に当る星のぎざはしに駆け登つた。美しい六甲の雪山を手取るように見た私は、午後の句会に来られる方々に見て、頂く心づもりをしていた。ところが午後の六甲山の雪はあつと言う間に消えていていつもの緑の情景に變つていた。

〈積もること稀な雪解を惜みけり〉

私は「雪解」という兼題の句会でその時のことを思い出してこの句を作つた。

皆さんの一句評で何人かの方に取り上げて頂いた。大沢美代女さんが「この句の稀なという表現がぴったりしていますね」と言つて頂いたことが嬉しかった。私はその言葉に至るまで随分あれこれ推敲したのである。

# 旬日記 汀子

平成二十四年五月五日 菅屋ホトトギス

この辺の余花も終りの雨となる  
ポケットに失せものありし子供の日

五月六日 祝 恵太君 御結婚

立夏 て ふ 声 美 しく 重 な り ぬ

五月六日 下 萌 句 会

勧めたる効果ありしと葉の日  
花穂上げたるマロニエに家居して  
卯浪越えゆかねばならぬ旅路あり  
又 美 穂 女 惚 ぶ 心 や 葉 の 日

五月七日 ロイヤル吟行会

着迷ふも夏になりたること確か  
万緑の中にホテルのシャンデリア  
もう夏といふこと忘れをりしかな  
シャンデリア涼しホテルの華やぎに  
薫風ともう言へさうな森の中

五月八日 大阪倶楽部

牡丹の咲く頃の雨今年また  
由々しきは名草に潜む根切虫  
葉桜となり素通りの道となる  
しばらくは薄暑を心地よきものと  
名苑といへどひそみて根切虫  
百年の定根切虫出て来たりけり

五月八日 綿葉倶楽部

気分だけ更衣して来たりけり  
夏めくといひまだ油断ならぬとも  
竜巻といふ現実も夏めく日  
白がちになりたる起居や更衣

五月十日 清交社

辻樓の合はぬ話も夏めきぬ  
飛魚の航玄海の一時の間  
贈られしカーネーションに旅帰り  
後継も大学生として端午  
一泊の五月の旅の荷は軽く  
夏帽子かぶりてみては旅仕度

五月十一日 工業倶楽部

山雨来て忽ち至る朴の花  
先づ若葉美しき辺りの庭案内  
今日の旅明日へつなぎてゐし薄暑

五月十三日 四国ホトトギス同人会

橋二つ渡れば阿波よ桐の花  
峡の道植田ととのひつつありぬ  
ぎしぎしも虎杖も野の一部分  
一泊の阿波の薄暑を楽しまむ

五月十三日 四国ホトトギス俳句大会

幾度も通ひし阿波のこたび夏  
帰路は又海越えてゆく涼しさよ  
三ヶ月 先は 踊 の 街 柑 塙

五月十五日 有恒俳句会

牡丹の色を消したる雨一日  
幾度も後戻りしして更衣  
きらめくは晴れゆく新樹なりしけり  
快晴が夏めて一日約しけり  
用心をよめて雨の日の更衣  
消えてゆく日の斑新樹の狭庭かな

五月十五日 祝 塚本令嬢 御結婚

夏めくや身軽になりて旅衣  
牡丹の色をそろへし祝心

五月十六日 無名会

軽暖に心地よき風招く窓  
海越えて薄暑の阿波に着きしこと  
よき旅路薄暑の頃でありしこと

染筆の枷やり終へし薄暑かな  
忘れものせしかに軽き更衣

五月十六日 夏潮句会

いつの間に蹴足となつてゐし家居  
天を突く刻々ありぬ今年竹  
今年竹伸びて会議のつづきをり  
マロニエはキャンドルツリー風薫る  
万緑の大方柄の占める庭

五月十七日 クラブ台同

文字摺草三瓶彩る野の起伏  
夕刻の雷雨予報を聞く出先  
阿波近き俯瞰渦巻く卯浪かな

五月二十日 たつの市民俳句大会

この町の名残惜しめば涼しさよ  
面影を追へば涼しき龍野かな  
龍野には語り継がるる人の夏

五月二十四日 きさらぎ会

筍の伸びて金明竹となる  
この頃の卯月曇の空の旅  
富士見えて卯月の空の旅終る  
み吉野の旅はや遠し卯月かな  
どんよりと卯月晴とははえるもの

五月二十五日 時雨句会

涼風より古茶を所望の客なりし  
まだ雨は止みさうもなき古茶淹るる  
金環食見て来しばかり古茶淹るる  
麦蘘を踏み来し畦の靴の裏

五月二十六日 句会と講演の会

旅立を見送るやうに通し鴨  
取り戻す健康美しや柿若葉  
雨一日快晴一日柿若葉  
東京の滞在長し夏めく日

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年五月三日虚子記念文学館投句

聖五月祈りの日々となりゆけり

五月五日 芦屋ホトギス会

子供の日おふくろの味てふカレー  
余花に会ふ旅多き身と諾ひて

五月六日 中野匡子様御子息御結婚祝

君にこそ百万本のさうびかな

五月六日 野分会芦屋例会

穴子釣瀬戸内海を独り占め  
ミシユランの二つ星てふ焼穴子  
穴子釣羽田空港指呼にして

五月八日 カトリック新聞選者吟

忌心を持ち寄りもしてイースター

五月十日 土筆会

セルを着て吉野の女主かな  
朴の花祈りを捧げたる午後  
このセルに戦後の生活偲びもし  
上を向いて歩かう朴の花がある  
苗売の声の笹となる小路

五月十三日 四国ホトギス同人会、大会

梵鐘の余韻埋めゆく若葉風  
夏遍路らしく省略されてをり  
夏潮の色を違へて阿波淡路

人は皆祈りの日々や夏遍路  
動くより子鳥視線浴びてをり  
徳島の街の真ん中でふ登山  
老鷲に明け渡したる眉山かな  
五月十四日 朝日カルチャー若草句会

男の子でも涙見せるさ柏餅  
又西の旅増えてきて夏に入る  
よつちやんもおいでよかしはもちたべよ  
大橋を二つ繋ぎて麦の秋  
前向きに前向きにまへむきに立夏  
故郷に立ちて憩へば夏来る  
五月十五日 草木瓜会

母の日を祝ふ息子は一年生  
夏めいて心の闇を払ひけり  
阿波の旅終へて一気に夏めける  
夏めいてきて三沢川らしくなる  
百人の母母の日の句座にあり  
五月十六日 蕉心会

明易や夢であればと思ふこと  
久々に猫と戯れたる薄暑  
軽暖を纏へば水辺親しかり  
鋭角に若葉風来る交差点  
人類の英知の塔や夏霞  
金魚何食べてんのそれ石ころや  
釣人に声かけながら缶ビール  
釣人に夏めく潮目ありにけり  
五月十七日 登高会

少女らの会話眩しく若楓  
若楓プラス思考に切替へて  
電気街寄りもし神田祭かな  
若楓紅を秘めたる淡さかな  
豆飯を三合炊いて子は二人  
背広脱ぎ神田祭の出立ちに  
五月十九日 二十日 伝統俳句協会中国支部大会

鯛網に狭められたる鯛の浦  
鳶の輪の真中鯛網収まりぬ  
五月二十一日 若水句会

花水木道幅使ひ切つてをり  
夏場所の閑取青く現れし  
合宿の初日 筍飯 五杯  
筍飯炊いて雀のお宿なる  
花水木金環食に染められて  
五月二十三日 目黒学園句会

一片の震へ牡丹の暮れ初むる  
朝光に松蟬黙を解き初む  
松蟬に山気濃くなる夕間暮れ  
五月十六日 ホトギス社句会

通し鴨あんだ故郷どうすんの  
通し鴨今夜はトゥールダルジャンへ  
子規食ひしてふ一本の柿若葉  
五月二十七日 野分会東京例会

三門の風は饒舌花は葉に  
境内に猿の曲芸花は葉に  
花は葉に追悼ミサに向かふ坂

# 雑詠

## 廣太郎 選

わが未来開く手術や冬紅葉 福山 竹下陶子  
 世界文化遺産の中の枯木立 同  
 行年の第九地球をつつみたる 同  
 み言葉のやうに雪降るチャペルかな 熊本 岩岡中正  
 雪の夜の話しはいつもさかのぼる 同  
 ペト口とは岩のことなり雪の嶺 同  
 冬晴れて絵馬の奏でる和音かな 神戸 山田佳乃  
 指先を濡らし北窓塞ぐかな 同  
 クリスマス乗せてクルーズ出航す 同  
 焚火いま諸の匂ひに変わりけり 長岡 安原 葉  
 遅れ来し客に焚火の名残あり 同  
 闇汁の闇に狎れざるわが五感 同  
 闇汁の顔ぶれすでに怪しかり 東京 内藤呈念  
 闇汁の探れば堅きひとの箸 同  
 雪片のこれぞフーガや追ひ追はれ 同  
 風花や比良の消息舞ふ淡海 奈良 古賀しぐれ  
 大琵琶に一声残し鳩潜く 同  
 堅田浦万羽の鴨に明け渡す 同

元旦の机辺片づきぬて淋し 神戸 長山あや  
 朝の日に命あたたため初雀 同  
 厳寒や奮ひ立つもの胸にあり 同  
 物言うてゐる鹿の目の寄つて来る 徳島 岩田公次  
 時雨雲被くが虚子の遠山か 同  
 引率の先生ぬのこづちまみれ 同  
 海の上に伸び寒晴の横たはる 香川 湯川 雅  
 方角といふ不確かさ恵方径 同  
 寒林に一人の世界貫ける 同  
 波ひとつひとつの淑気隅田川 東京 橋本くに彦  
 手鏡の息かけなほす初鏡 同  
 俳人のしつこく覗く寒牡丹 同  
 富士見えて箱根しぐれと人の言ふ 熱海 嶋田一步  
 芦の湖の大きく見え来枯木立 同  
 箱根関所跡とし遣り枯木立 同  
 逆光のポインセチアを置ける窓 東京 今井千鶴子  
 遊学の娘の戻りをり漱石忌 同  
 言ふならく非情非々情漱石忌 同  
 寒行の装束透けしをんなかな 渋川 木暮陶句郎  
 恋は捨ててもマフラーは捨てられず 同  
 牡蠣割女軍手をとれば細き指 同  
 待たされてポインセチアを憎みけり 東京 大久保白村  
 見番にひらりと入る緋のコート 同  
 コート著て日本舞踊の名取なる 同

# 雑詠句評（四月号より）

雅　・仁義・純也  
佳　乃・くに彦・しげ人  
さい雪・比奈夫・公次  
一　歩・廣太郎

## 樹に倚りて亡き娘を思ふ小春の日

榎原 稲岡 長

将来を囑望されていたとても美しいバイオリンストでいらした。そのお嬢様を若くして亡くされたときの、氏のお悲しみは如何ばかりであったであろうかは、想像すら出来ない。何年経つても、ふとした事、ふとした折に、思い出されることでしょう。

大いなる父の愛は小春に包まれるよりだと思ふ。小春の中で樹に凭れかかる作者の横顔の陰影が、父親の心情を猶更深く伝えるのである。（雅）

ヴァイオリニストである御嬢様を不慮の事故で若くして亡くされた作者である。逆縁の悲しみは想像するに余りあるが、決して忘れる事の無い思ひ出は何時も甦ってくるのだから。ぽかぽかと初冬の「小春の日」にふと思ひ出しておられる作者の気持が切なく伝わってくる。（廣太郎）

## 仏壇が居場所となりし妻の秋

榎原

木村享史

句の解釈としては、下五が先であろう。「妻の秋」には、亡き妻を偲び、何と淋しく哀しい秋なのであるという作者の慨歎が籠められている。次に、「仏壇が居場所となりし」にも、今や仏壇が妻の居場所になってしまったという作者の慨歎が籠められている。更に「なりし」と切ったところに一層深い慨歎を覚える。作者の慨歎が、充分に表現されている句である。（仁義）

先月の御句の通り、最愛の奥様を亡くされ、その御臨終から御葬儀等を経て、一段落をされたのであろう。仏教の儀式の事には疎いのだが、位牌が安置された、という事だろうか。何れにせよこれからは仏壇に居られる、という作者の安堵感と、淋しさが交錯しているような、何か悲しみも感じられる。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

冬の月山廬海抜千メートル  
 ミュージカル跳ねし札幌冬の月  
 生身魂あの日を語る重き口  
 生身魂平和の鐘に涙して  
 シベリアの冬を連れ来し鴨なりし  
 武装解除せし戦場や終戦日  
 哲学の道の笹子でありしかな  
 笹鳴や吉野山路をふと思ふ  
 花辣萋畑に日輪燃え落つる  
 紫は日に燃ゆる色花辣萋  
 生姜酒つくる我が身をいとほし  
 北国の傘手放せぬ時雨癖  
 ちよと我に笑ひかけみる初鏡  
 ひとり居の小さなあくびお元日  
 紙屋川源流となる冬の山  
 元旦や卒寿初心となる船出  
 ねんねんよけふはふはほしごとん  
 旅戻りやはり我家の蒲団かな

小金井 武井良平  
 同 稲畑廣太郎  
 東京 同  
 同 福山 竹下陶子  
 同 長岡 安原 葉  
 同 徳島 上崎暮潮  
 同 榎原 稲岡 長  
 同 東京 今井千鶴子  
 同 吹田 宮崎 正  
 同 東京 河野美奇  
 同

己子選

マスクして政治のことを考へる  
 マスクして靱いよいよ古びたる  
 古暦母亡き日々の流れゆく  
 行年の母の名を消す住所録  
 道真を知らぬ子ばかり天満書  
 母子草摘めば田平子ついて来し  
 目指すことありもし年のあらたなる  
 椿咲く紅のなき世の紅として  
 悴みて言はねばならぬことを言ふ  
 心冴えて見えざるもの見ゆる真夜  
 冬花火出で見るといふこともなく  
 豪華 船なるも碇泊 冬花火  
 どことなき歌舞練場の春支度  
 昼からは冬曇りたる船場の灯  
 泥染めの水面虹色冬うらら  
 鳥唄の三味しみじみと小夜時雨  
 佇みて己小さく冬の山  
 数へ日の誰も気付かぬ入日かな

熊本 岩岡中正  
 同 神戸 三村純也  
 同 後藤比奈夫  
 同 大阪 蔦 三郎  
 同 神戸 長山あや  
 同 熱海 嶋田一歩  
 同 箕面 井上浩一郎  
 同 千葉 大木さつき  
 同 東京 岩村恵子  
 同

# 天地有情句評

汀子

吉野山への記憶を誘う笹鳴。

花 辣 菲 畑 に 日 輪 燃 え 落 つ る 徳島 上 崎 暮 潮

辣菲の花の色に入日が当る瞬時。

ミュージカル跳ねし札幌冬の月 小金井 武井良平

生姜酒つくる我が身をいとほしみ 樺原 稲岡 長

感動を抱き札幌の夜空の冬の月を仰ぐ。

生姜酒をつくる自分の姿をふと憐れむ。

生身魂あの日を語る重き口 東京 稲畑廣太郎

ひとり居の小さなあくびお元日 東京 今井千鶴子

あの日 of 惨憺たる経験を語る生身魂。

元日の作者の退屈の瞬時。

武装解除せし戦場や終戦日 福山 竹下陶子

元旦や卒寿初心となる船出 吹田 宮崎 正

戦争と平和。

名医ならではの元旦の謙讓な心。

笹鳴や吉野山路をふと思ふ 長岡 安原 葉

(以下略)